

## 《7》座談会／地域子育て支援拠点の始まりとこれから

—— 地域子育て支援拠点（以下「拠点」という。）は、平成18（2006）年の事業開始後、平成23（2011）年度には全区での設置を完了し、そこから10年近くが経過したところですが、本日は、開所当初に立ち上げを行い、

現在も施設長又は法人の代表者として拠点を運営し、地域での子育て支援を担っていただいてる3名の方にお集まりいただきました。横浜市の拠点事業についていろいろとお聞かせいただきたいと思っております。よろしくお願いたします。

まず自己紹介をお願いします。  
**【高村】** 戸塚区の拠点を運営しているNPO法人子育てネットワークゆめの高村です。1999年に戸塚区俣野町で仲間と共に子育てネットワークゆめを立ち上げ、2002年に「親と子のつどいの広場ぼっぼの家」を開所し法人格を取得しました。その後2008年から2017年ま

で「戸塚区地域子育て支援拠点とつとつ」の施設長を務めました。

**【塚原】** 神奈川区地域子育て支援拠点かなーちえの塚原です。神奈川区すくすくかめっ子事業等地域活動に関わり、2007年NPO法人親がめ設立以降、地域子育て支援拠点の運営にチームで取り組んでいます。分野を超えた広い視座の獲得を目的に、18区の拠点ネットワーク等から発展したラシク045という一般社団法人を今年原さんたちとともに設立し、現在その活動もしているところです。

**【原】** 認定NPO法人びーのびーが運営している港北区地域子育て支援拠点どろっぶで施設長をしている原です。びーのびーのは今年で20周年を迎え、拠点どろっぶでの活動も15年目の節目になりました。そのような年に拠点事業について、実践者として一緒に常設の場のあり方を追い求めてきた仲間と共に、語り残せる貴重な機会をいただき感

謝しています。

### ■アンケート調査の結果から見えてきたもの

—— それでは始めに、2017年に18区の拠点が主体となつて、3歳児健診に来られた保護者の方を対象に実施をした「子育てについてのアンケート」のことからお話に入っていきたいと思います。調査の概要と実施に至った経緯を教えてくださいませんか。

**【高村】** 私が施設長だったときに、18拠点の施設長で拠点の入り口とその先につながる出口を「見える化」できないかということを1年がかりで検討していました。拠点の運営をしながらではなかなか進まないの、研究をされている方にも入っていたらどうと、横浜国立大学の相馬直子先生にお声かけをさせていただきました。そして、東京福祉大学短期大学の堀聡子先生、生協総合研究所の近本聡子先生にもご協力をいた

き、また、横浜市にもお願いをして地域の子育て施設の利用や地域への関わりなどを内容とするアンケートをやってみようということになりました。拠点等に来ていない人たちも含めたアンケートです。本日は3歳児の保護者だけでなく、その出口でどうなったかということも知れたかったため、拠点を卒業していった方たちの声も伺いたかったのですが、なかなか実施が難しいこともあって、3歳児健診の保護者の方を対象に実施しました。それぞれの区の保健師の皆さんにとっても協力していただいで、回収率も81.1%ととても高いものになりました。

**【原】** 子育て支援施策として、幼稚園や保育園という、子どもを預ける場所しかなかった時代から、横浜市がモデルで立ち上げ、拠点事業が始まって10年以上が経ったところで、居場所の効果や成果を有識者の先生方に意味づけをしていただいでではなくて、



**塚原 泉**  
 神奈川区地域子育て支援拠点かなーちえ施設長



**高村 美智子**  
 NPO法人子育てネットワークゆめ代表理事

図1 地域子育て支援拠点・親と子のつどいの広場等の利用状況

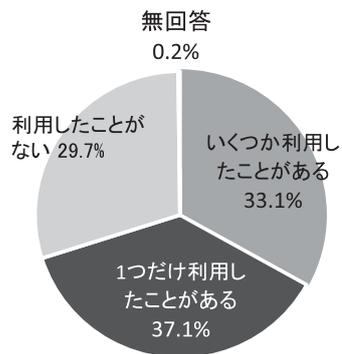


図2 1か月の利用頻度

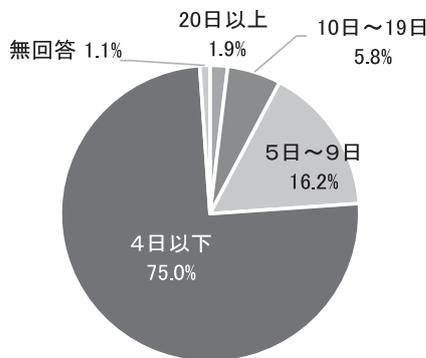
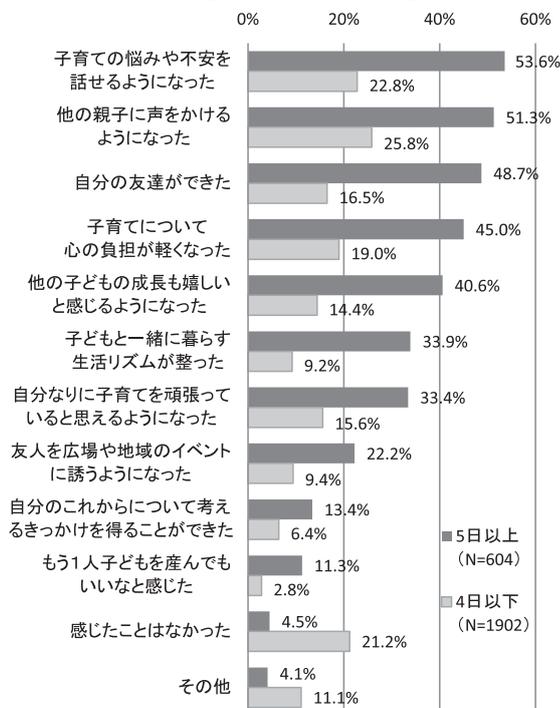


図3 利用して感じたことや変わったこと【1か月の利用頻度別】



23 ■ 特集・横浜の地域における子育て支援

私たち自身が実践者として評価し、拠点事業の今後をしっかりと見据えようとも考えていました。あと何年かすると、おそらく子どもたちのなかから、「あそこ（拠点や親と子のつどいの広場）に行っていた、通っていた」みたいな話が出てくると思いますが、拠点や親と子のつどいの広場（以下「広場」という。）で過ごしていた子とそうではない子とどう違うのか、拠点や広場という多様な人たちと出合える場を経由して育っていった子どもたちの育ちを追っていくということも、今後の役割として出てくるだろうという思いもありました。

この調査では、1週間に1回以上来ている人と月に1、2回の人では、「自分を支えてくれる人がいると思うようになった」とか、「この区に生まれて良かったと思う」とか、効果として一番大事にしたいととらえている部分で大きな違いがあることが分かりました。1日わずか2、3時間、週に1回くらいで、どうしてここまで高く変容をもたらせているのかというところについては、いろいろな意見があると思いますが、やはりその地域の人たちが運営者、スタッフになっていないところ、そこが横浜の良さではないかと考えています。広場は特にそうだと思いますが、利

用者がスタッフになるとか、地域のキーマンがスタッフになったりというところで、様々な相談や問合せにおいても、この幼稚園、あそこの公園、お店、町会のことなど、そういう地域のバックボーンが、わずか2時間、週1回の利用でも、その人を通じて見えてくるものがあるんだろうと感じています。地域の力を持っている人たちがエンパワメント（※1）して拠点事業を担えているというところが、他の自治体とは少し違う、大きな成果、特長だと思いますし、そういうところも調査で浮き彫りになったと思います。

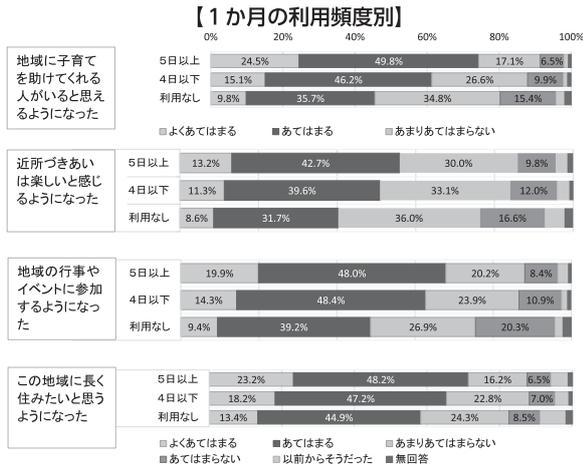
【塚原】最近、利用層が変化して、働く世代の割合が高くなっていて、地域社会性の発達と命名しましたが、入り口でこれだけ、地域社会性の発達が高くなっていることがデータでも裏づけをされました。また併せて、最初の育児、産休、若しくはそれ以前の人たちがどう地域に結びつけるかということがすごく大事だということが数でも実証されました。それは私たち拠点を運営するスタッフたちのモチベーションにもつながりますし、拠点の目的や今後の計画にもつながっていくと思います。全てということではありませんが、データを基に「見える化」をして、18

進行  
援助  
子ども青少年局子育て支



原美紀  
港北区地域子育て支援拠点どうぶつ施設長

図4 子育てを通して変わったところ（地域との関わり）



「原」仕事への復帰が早くなっている。子育てを通して、地域との関わりが深まり、近所づきあいや地域の行事やイベントに参加するようになった。この地域に長く住みたいと思うようになった。子育てを通して、地域との関わりが深まり、近所づきあいや地域の行事やイベントに参加するようになった。この地域に長く住みたいと思うようになった。

「塚原」横浜市の特徴は、拠点の設置の目的に、地域の創出という、個人化したその子育てを社会で子育てしようと、そしてその子育てを通して社会が豊かになっていく、人材を循環していくという、すごく壮大な目的を置いたところにあります。私はそれに向かって動いているわけですし、一人の個人が妊娠期から変わっていく変容と、そういう人たちに地域を紹介しながら、社会と触れ合っていくというところが一番の肝で、ますます子育ての社会化が一般になって、地域の人も、子育て世代のために思っているという、元気がなくなってきたという、そういう現象も出てきて、実は子育てというところから、社会を包摂するいろんなことがうまくいくかもしれないという、実感の持てる調査になったと思っています。

次に、拠点の有する機能についてお話しください。横濱は事業を始めたときから、親子の居場所機能や子育て相談機能などのほかに、ネットワーク機能と人材育成機能を拠点の機能としてお考えでしょうか。

「高村」拠点によってやり方はそれぞれ違うと思いますが、戸塚区は南北に長く一番広い区で、最初に拠点を始めたときは、「拠点で全部まとめる、ネットワークを構築するなんて無理」ってまず思いました。それで、戸塚区のハートプランという福祉計画に着目して、それを実施している10か所の地域ケアプラザ（※3）と1か所ずつ関係をつくっていつて地区ごと連絡会をつくりました。途中からは区役所も協働体制に入ってくださり、昨年から、区役所と共に戸塚区共通の課題やその解決策のヒントを見つかる場として子育て連絡会の全体会を開催できるようになりました。10数年かかりましたが、これからの戸塚のネットワークを見ていくと、このように感じています。（笑）

た、大きな一歩であったと思っています。また、調査結果の報告では、「エンゲージメント」という言葉が使われています。「高村」「エンゲージメント」は、みんなの共通の気持ちを何か表す言葉はないだろうかということ、プロジェクトだった数区のメンバーで見つけた言葉です。企業活動の分野で「顧客の注意や興味を惹きつけて、つながりを強くする」とか「従業員の会社に対する愛着や思い入れ、相互の絆」などの意味で使われている言葉のようです。スタッフが「お母さん、お父さんたちに、興味のあることや得意

そうなることを考えて、「こういうことやらない?」「こういうこと得意だね?」と巻き込みながら、お世話焼きの役をやって惹きつけて、つながりをつくっていくという感じ。そして、そういう方たちがスタッフになったり、地域の核になったりして、私たちがスタッフの役割は大きいと思いますし、地域のおばちゃん、おじちゃんだからこそできることかもしれません。地域で様々な経験をしているから、その話もできて、手助けができるというところが横浜の拠点の大きなところかなと、調査結果を読み直して思いました。

「原」仕事への復帰が早くなっている。子育てを通して、地域との関わりが深まり、近所づきあいや地域の行事やイベントに参加するようになった。この地域に長く住みたいと思うようになった。子育てを通して、地域との関わりが深まり、近所づきあいや地域の行事やイベントに参加するようになった。この地域に長く住みたいと思うようになった。

「塚原」横浜市の特徴は、拠点の設置の目的に、地域の創出という、個人化したその子育てを社会で子育てしようと、そしてその子育てを通して社会が豊かになっていく、人材を循環していくという、すごく壮大な目的を置いたところにあります。私はそれに向かって動いているわけですし、一人の個人が妊娠期から変わっていく変容と、そういう人たちに地域を紹介しながら、社会と触れ合っていくというところが一番の肝で、ますます子育ての社会化が一般になって、地域の人も、子育てのために思っているという、元気がなくなってきたという、そういう現象も出てきて、実は子育てというところから、社会を包摂するいろんなことがうまくいくかもしれないという、実感の持てる調査になったと思っています。

次に、拠点の有する機能についてお話しください。横濱は事業を始めたときから、親子の居場所機能や子育て相談機能などのほかに、ネットワーク機能と人材育成機能を拠点の機能としてお考えでしょうか。

会議だけのネットワークではなくて、実際の事業でつながっているネットワークに成長し続けています。外遊びにしても、親の学習の場にしても、子どもの居場所づくりにしても、つながるの必要を感じたり、面白そうだからということと協力したり一緒に行う。そういうつながりができたのは、大変うれしく思っています。会議でも「これだけのメンバーがいるんだから、できることをやろうよ」と話をして、取組が具体化していく。例えば、うちの拠点の事業に「仲間トーク」という、テーマを設けた当事者ならではのトークの場があって、アラフォーやアラハタ、シングルやステップファミリー、双子、国際交流など、ありとあらゆるものがテーマになります。ネットワーキングを活用して開催しようとか、情報が共有されて地域ケアプラザで自主事業が立ち上がったりと、取組が広がっていきます。障害や共生社会というテーマで小学校や専門学校に啓発の授業に行くと、そこに参加していた先生が「自分の学校にも来てほしい」「学童保育にも」と話をされて、どんどん連鎖していきます。拠点は間接援助だと考えていますので、い

つまでも一つひとつの事業に関わっていくことは難しくもありませんが、種を蒔いて、育つまではすごく丁寧に寄り添って、そのネットワークが更に広がっていく。それが本場のネットワークなのかなというのを感じています。

「港北区はいかがですか。――」  
「原」拠点という常設の場があるというのはどういうことなのかなど、立ち上げ当初にいろいろと考えたりしたのですが、開所当時、最初は5機能でしたが、「初年度から5本柱全部はできない」と行政担当者にお伝えしました。ネットワーク、人材育成も、誰のために、何のためにネットワークが必要なのか。人材育成も、どこから何を学ぶのか。その土台を積んでいない限り、砂の城になってしまいますので、最初はつどいの広場での実践を基に拠点のひろばの基盤をじっくり創らせてほしいと3年ぐらい専心させてもらいました。そこを認めていただいた横浜市もすごいと思いますけど。(笑)「やっぱりひろばが大事」と個人としては今でも思っていますし、スタッフが受付やカウンセラー業務に徹するのではなくて、果敢に親子の中に入っていくひろばとは何なのか、温

かく迎える」「交流」や「つながる」とはどういうことなのか、そういう言葉の一つひとつがどういうものであるのか、スタッフ内、法人内ですごく議論をしました。それは場を持った私たちとして、何をしたいのかということに對峙することでした。ネットワーク、人材育成は、おいそれとはすぐにはできないと思えました。今まで地域の人が自主的に自立的に活動されてきたところを横浜市が事業として行っていくというからは、一石投じられるような何かしら新しい価値を据えていかなければいけないとも思いました。

人材育成については、地域福祉保健計画でもよく人材不足と言われますが、私はそうは思っていないので、「こんな就労人口が増えても人材は溢れるほどいる」と思っています。着火していくだけのものがあるかないかが大事で、着火された人はいっぱいいるし、ちよつとでも種火が着けば猛火になる人たちはいっぱいいる。だからこそ人材育成もどこから何を学ぶのか、単に座学の講座をするのではなく、人が変容していくプロセスをしっかりとしたいと考えています。

「このところありますか？」  
「どこに行けばいいんですか？」といった様々な問合せがある中で、ひろばのスタッフが、その紹介する先をパンフレットを見せるだけではなくて、そこがどれだけ山坂を上っていくのか、ベビーカーを押して、又は抱っこして行きやすいところなのかなどの情報を地域に出て行って、ちゃんと知っておく。つなぐ側が先のことを知っていることが大事で、その先をちゃんと知っておかなければ、紹介とか、つなぐということではできないと思いますし、エラー&エラーでも当事者に届く実働のネットワークづくりを心掛けています。

「原」子育て支援というのは、直接的な支援ももちろん大事ですが、先ほどお話ししたように、内部でどれだけ議論できたか、どれだけ自分自身の中で問いを多く立てていけるか。これは専門職の方はみんなそうしていらっしゃるかも

「原」次に、拠点と区役所との「協働」についてお聞かせいただきたいと思っています。拠点事業は、運営法人と区役所とが目標を共有し、連携・協

「原」問いを立てていって、その臨床知であったり、それぞれが持っている暗黙知を、特定の施設等だけでなく、科学の力や他の分野の力も借りて、それこそネットワークの中で形式知にしていく。そのようなこれからの10年が始まるんだなって思っています。

「原」次に、拠点と区役所との「協働」についてお聞かせいただきたいと思っています。拠点事業は、運営法人と区役所とが目標を共有し、連携・協

「原」次に、拠点と区役所との「協働」についてお聞かせいただきたいと思っています。拠点事業は、運営法人と区役所とが目標を共有し、連携・協

力して行っている。事業実施に当たっては対等の立場で臨んでいるというところが横浜の大きな特徴であると思います。そこを掘り下げてみたいと思いますが、いかがでしょうか。

【高村】最初の頃は、施設長会議などの機会に「協働」についていろいろ学びましたし、協定書の読み合わせをしたりしました。当時は区との打合せで「協働ですよ」と言ってもなかなか噛み合わないこともありました。今はそのようなことはなく、お互いに頑張っていると思います。

【塚原】区の職員は3、4年、保健師の方でも7、8年くらいはスパンで異動になるため、私たちはこの事業の根底に流れている大事なことや、ここが肝なんだという部分、これを大事にして地域の人たちがこれだけ来ているんだという話を語り継ぐストーリーテラーであると思っています。人が代わっても、そこはきちんと伝播されてパトロンが受け継がれていく。現場の事業の大事なことをピンポイントですく上げて制度や政策につなげる。私たちは制度や政策にする部分ではできませんので、行政の方には、プロセスも大事にしながら、政策

や制度につなげる、それが社会に還っていく、次世代に還っていくということをお願いしたいと思っています。もう何人かそういう人たちに会っていますし、地域の課題や人材もすくい上げて、市民と一緒にすくい上げて、そうした大変な紆余曲折を楽しめる人に出会いたいなと思っています。

—— なかなか大きな宿題ですね。(笑)

【原】モデル事業スタート当時は、5つの機能について、一つひとつの要綱の内容について区と議論をして役割分担表をつくりました。初めての事業でしたし、相談事業一つとっても、私たちがいわゆる相談として大事にしたいことと、区の母子保健の保健師さんたちが大事にする相談ではその形式からも違いがありました。お互いが何を大事にするのかをぶつけ合うツールが役割分担表だったのですが、当初、対等になんかと言いたったのが、今思うと「協働」のスタートだったんだらうと思います。あれから15年経って協働自体は、私自身としてはすく進んできたなと思っています。拠点という箱モノの事業に何の色を塗っていくのか、真剣に考える必要がある

りますし、百人、五百人とマスがいらないと動けない行政と、たった一人のためでも仮説を立てて「絶対これ必要だ」と思って動く私たち。スタンスの違いはありますが、これをぶつけ合うことではじめて対処型ではない、予防として機能していける拠点になりうるのだと思っています。「これとこれをやって」と言われて、そのとおりにやるほうが楽かもしれませんが、市民の声に、今必要なこと、求められることを考えながら協働で事業運営ができる、本当にすくいい事業だと思っています。その分責任も大きいと思います。

—— 行政としても、事業を運営する手法としては、高度で行政の力がすく試される手法だと思っています。他にはいかがですか。

【高村】2年くらい前に、拠点独自の赤ちゃんプログラムの実施を区に提案したことがあります。最初はあまり賛同していただけなかったのですが、私たちのスタッフは第一子を産んだお母さんにとって必要なプログラムだと自負していましたので、かなり区とやりとりをしました。今は区に認めていただいて、今年4回実施できるようになっ

て。ですが、そういうやりとりもスタッフにとつてよい経験になったと思います。区と単にいつも仲良くして言うとおりにするのはなく、対等な関係で関わってほしいとスタッフには伝えていきます。それは協働で何かをつくり出していくには必要なことだと思います。

—— みんなと、スタッフと、あるいはもしかしたら地域の人も含めて共有して考えていくということが、協働の良さを守っていくためにはすく大事かもしれないですね。他にはいかがでしょうか。

【塚原】私たちは毎年、福祉分野の人にこそ経営学のプロジェクトマネジメントの手法を学んでほしいということ、日本大学文理学部の田中謙准教授を招いてネットワーキング勉強会をしています。田中先生と出会ったのは、私たちが療育親子ネットワークを開いたときに、山梨大学から「見学に行きたい」との連絡があつて、それでお越しになったのですが、最後にせつかなので一言お話をいただいたら、「今日の話って、これが命題にあつて、これとこの論点があつて、こういう話ですよ」と、すく理路整然とお話をされ

て。「すごい！そのとおり」と思つて、それから毎年来ていただいています。地域ケアプラザなど、いろんなスタッフが参加していますが、福祉分野の人はどうしても気持ちがあつてやる気満々で、人もお金も限られているのに次から次に始めてしまう傾向があります。ですが、一つ始めたから一つなくさないというプロジェクトマネジメントの学びを得て、「暴走しない私ではない」と思いました。子育て支援分野や福祉分野にはない論理を学術的に学んで、その話をポカンと聞いてメモして、段々1か月くらい経つと「あつ、こういうことか」とつて咀嚼して、1年後にはちゃんと形式知になるように思います。それから、うちでは、たくさんある事業や業務をスタッフの間でどう伝授するかについて、以前から『紙芝居法』という方法を取り入れていて、全部紙芝居になっていて、人が変わっても紙芝居があれば全部語れる、伝えられる仕組みになっています。田中先生によると、K/P法というそ

## ■ 今後の展望、ビジョン

—— 今新型コロナウイルス感染症の影響で、社会や地域や親子や妊婦の方にとっても大きな変化があり、そういうところにも社会的な要請があるように思います。そういった中で、これからの拠点のビジョンなり展開のイメージといったところを最後に聞かせてください。

【原】先ほどもお話ししましたが、就労する人が多くなつていくからこそ、拠点は子育てスタート地点の人を対象とする、入り口に位置する分、そこで出会う人は多様であり、活動は包括的なものでありたいと思います。支援拠点という名称で「支援」が付いていますが、果たして客体的な表現が枕詞でいいのだろうか？「支援する場所」という塀を物理的にも心理的にも壊す」みたいな話をかなり前からしています。

—— どういう意味ですか？  
【原】地域子育て支援拠点の「地域」というのは本来どういうものか？を考えると、拠点を来て満足感を得て帰ってもらうだけでなく、むしろ拠点自体が地域そのもの若しくは似て非なるものに近づくことが理想かと考えています。

理念的な話かもしれませんが、囲われた空間の中で全てが良かったと完結するのではなく、地域だからこそトラブルや葛藤もいっぱいあることが大事かと思っています。多様な人との交わりの中でその環境を保障するという意味で塀を壊す（どろつぶの場合は物理的にもそこをやりたい）、来やすさ、アクセシビリティを考えていかないとならない。

安心安全の保障は大事ですが、行き過ぎてしまわないように、ここがないと生きていけないという人を増産することが役割ではないと思います。どれだけ垣根を低くできるかは、スタッフだけではできないことで、異分野、他分子を混ぜていけるか、自分たちの心のハードル、心持ちのとらえ方に関わってくるはずですよ。昔の子育てではなかった拠点・ひろばがこの時代あえて求められるのは、偶発的に第三者と出会う場や多様な人たちとの交流がなくなったからで、故意的に常設の場に出会わすという環境が必要になったからです。事業となるトリスク回避や継続性を重んじるあまりに、どうしても管理的かつマネジメント的な要素が色濃くなってしまい、誰のための何のための事業だったのかを見つめる力が弱まってくる。この事業が約20年経つ今、段々私たちの経験が自信となり、原点に戻り立ち返ることを曇らせ、鈍らせるという側面があるかもしれない。自分たちだけで決めない、その時期を利用する親子の志向や意見が活動の方向性を決めるものであり、全てをやりきらない、子育てがそうであるように他者の手を借りてやっていくこと、ひいては拠点・ひろばの活用については地域発でアイディアが出てくるくらいになれば本物だと思っています。

拠点事業については、それだけクリエイティブ、創造に富んだ活動であるということに感謝していますし、実践したことが自分の住まう地域の豊かさになって返ってくる、我が子が生きていく環境づくりに確実に寄与していると思うとやりがいを感じます。進（深）化、変化を認めてもらえる場、だからこそ思考を止めてはならないですし、常に横浜市と次の時代を描いていきたいなと思っています。

【塚原】原さんの言うように、いろんな垣根を取っ払って、エネルギーを混ぜこぜにしなからやっていきたいなと思っています。一つの事例ですが、中学校のふれあい授業を13年前に立ち上げた先生から「高校に転勤になったけど、また来てくれる？」って連絡があった。鶴見区、港北区の拠点を力を合わせて、分担して子育てに関わる授業を行いました。各区の垣根も取り払って、18区の様々な取組をお互いに広げていきたいと思えます。

西村美東士さんという方の「参加型子育てまちづくり」から見た社会開放型 子育て支援研究の展望」によると、これからはもう子育て支援学という学問を打ち立てる時代だそうです。自分たちも変わっていったらいいなと思っています。

【高村】二人とも壮大ですね。（笑）でも本当ですね。私も戸塚区のことだけを考えると、いうより、もっと広いネットワークを活用していかなくてはいけないと思っています。それぐらいの基盤はできていますので、三輪先生がおっしゃる「群とまね」ではありませんが、まねはヒントだと思つてより良いものをつくっていくことというのは、今求められていることだと思います。昔のように専業主婦の集まりが子育てをしていて、そうではない人は保育園に行つてと

いう時代ではありませんし、外国人の方も本当によく来てくださいます。多様さを有する社会になっている中で、そういうふうなネットワークを更に広げていかなければいけない、今のままだったらやっ

ていけないという思いがあります。

10年後、20年後も、なかなか少子化の歯止めはかからないかもしれませんが、少なくとも必要ということをお互いに理解していただきたいと思つています。私たちも引き続き頑張つて取り組んでいこうと思つています。

—— あつという間に1時間半が過ぎてしまいました。いろいろと勉強になることもたくさんありました。本日はありがとうございました。

※1 エバワメント  
その人が本来持っている力を引き出すこと

※2 母子愛着形成  
赤ちゃんと母親（養育者）との間の心のつながりを形づくること。母親との愛着形成は妊娠中にはじまり、出産後の世話やスキンシップなどによって深まる。

※3 地域ケアプラザ  
高齢者、子ども、障害のある人など誰もが地域で安心して暮らせるよう、身近な福祉・保健の拠点として様々な取組を行っている横浜市独自の施設。令和2年4月現在、市内に140か所